

発話行為論・草稿

灰 庭 久 博

本論文は、故灰庭久博君が、東京大学大学院社会学研究科Aコースに提出する修士論文として執筆していた草稿を、灰庭久博遺稿集を刊行する会が、その責任に於て掲載するものである。尚、明らかに誤字、略字と思われる箇所は、本文中にて表記を改め、*印を付した。原表記は、論文末の編者註に一括して示してある。また、草稿中に書き入れられていた註は、各節ごとにまとめて、節末に示した。それ以外には、一切、加筆訂正を行っていない。

序 論

社会の問題を考えるときに、それと自分の問題とがどう関わっているのかというのがここでの問題設定である。社会の状態が大きく波立っているときには、ほくらはうじうじと自分にこだわるのを止めて、その波立ちのなかに飛びこんでいくことができるかもしれない。その波立ちが終息にむかうとき、ほくらは波立ちのなかの自由さを忘れはじめて、急速に自分のなかに閉じこもりはじめる。ことに、その波立ちを実際に経験することなく、終息のあとで追体験するというようなときには、自由さよりも、重苦しさばかりが眼について、いっそう自分にこだわることになるのかもしれない。ここでの課題は、社会の問題と自分の問題との関わりあい確かめたいということであるけれど、自分の問題の側から社会の問題の側へと自分を解放していきたいという方向に重点があるのは、ほく自身の状態を解放したいという課題であるとともに、東大闘争^{*}後の世代のうじうじした部分の課題であるのかもしれない。このとき、自分の問題から社会の問題への方向といっても、自分の問題からそれとは別の社会の問題へということではない。むしろ、自分にのみこだわってうじうじ閉じこもっている状態から、自分の在り方と社会の在り方との双方を同時に問題にしていく状態へ自己を解放し素直にしていくようなことをさしている。

ある程度はじめてから自分をふっきって素直に状況に対するというふうに自分を形成してきた人たちは、そんなにうじうじすることなくやっていけるだろう。うじうじと自分に閉じこもっていたほくをふりかえてみると、自分に閉じこもっているというのがどういうことなのかほんとうには気づいていず、「自分に閉じこもっているというのはそれはそうなんだけれども」とか、「でもやっぱりこわくて」とか、「だけでもここでつまづくではないか」とかいったふうに、際限なくぐるぐるまわりをやっているようである。そういうところから自由になるのは、実際これではだめだ、やるしかないと実感することからはじまるように思う。いまほくはやるしかないと思いはこめているが、そのことを確かめておこう。

どちらかと言えば、ぼく(たち)は、頭で逆立ちして歩いているようである。どこかで状況に体でぶつかることなく、ああだこうだと解釈してはそれですまし、あるいは、それほどではないにしても、結局状況から身をひいてしまうことになる。そうならず、素直に自分を表現し、状況にむかっていくということが大切だろう。おそらく、東大闘争^{*}はそういうことを言っていたのだろうと、改めて思う。ここで、ぼくの問題設定を社会的な問題だと気負って説明することは避けたいけれど、おそらくぼくひとりの問題でもないだろうし、また頭で逆立ちしているぼく(たち)——どういえばいいのだろうか、知識人、にせ知識人、プチ・ブル、プチ・ブル・インテリゲンチヤ……?——だけの問題でもないと思う。いくらかたどっておこう。

第一章 発話行為論

わたしたちがものを話し書くというのは、わたしたち自身にとってどのような行為なのであろうか。ある具体的な状況のうちで発話することにはどのような意味があるのであろうか。発話することによってわたしたちは何を為し、発話しないことによって何を為すのであろうか。ほほこのような問いによっておおわれる問題を明らかにすること、それがここでの課題である。

第一節 発話の時間性

発話という事柄は、ここでの論述が対象としようとするものだが、それ以前に、それぞれの個人にとってわがことである。発話とわたしが述べる場合、経験的な対象であるという意味とともに、わがことであるという意味がこめられている。発話はわがことであるから、発話それ自体が直接に考察の対象となるわけではなくて、事柄としての発話とそれを記述しようとするわたしの間には、事柄としての発話に面するそれぞれの個人が介在する。それぞれの個人にとってわがことである発話を、わたしにとってわがことである発話をひとつの極としてわたしが記述する。これは、方法的内観主義でも、方法的思弁主義でもない。方法的内観主義や方法的思弁主義というレッテルづけや自認は、さまざまな営みをそのひとつひとつのなかで完結的にこなす志から生じる。この論述は、他へのもたれこみやもたれあい企てるものでは決してないが、かといって、この論述の正しさや意味をこの論述のなかで完結的に証そうとしているわけでもない。この論述自体ひとつの発話であり、その正しさや意味は発話としてしか証されない。この論述は他の人びとに向けられたわたしの発話であり、そのさまざまな発話のうちで確かめられ、練られ、拒絶されるものである。だから逆に言えば相対主義というレッテルづけや自認からも自由である。この論述というわたしの発話は、わたしのありようをつむぎ確かめるものであり、かつまた他の人びとの発話と絡めることによりわたしの確かさを練りあげ、他の確かさとつなぎあうことである。内観(内省)や思弁はふだんいつれかの局面でわたしたちがしていることであり、それに唯一無二の方法という含みを与える必要もなければ、それを全否定する必要もない。

わがこととしての発話は時間的な過程である。時間的な過程という内実を以下のように、たとえば三つに区分けしよう。第一は、線的特質としての時間性である。線的特質としての時間性という

ことを厳密に規定しようとするさまざまな困難が生じる。ここでは、この線的特質としての時間性ということとはさほど重要ではないので、音や文字・語・文などが順序をもって生じ、しかも通常その順序どおりに受けとられることになるだけでも考えておくことにしよう。スーザン・ランガーは、人間の表現＝シンボルを時間という観点から二つに区分している。ひとつは絵画のような、表現の全貌を一瞬にしてとらえうる現示的シンボル、もうひとつは、ことばのような、シンボルが時間的に配列されている論弁的シンボルである。人間の表現活動は、通常ものとしてあるものにある形態を与えることであるから一瞬にして行ないえずに、時間がかかる。その意味では、ほとんどどの表現活動にも時間がこびりついているが、現示的シンボルと論弁的シンボルとのちがいは、表現活動のちがいでなくて、表現受容のちがいだと言える。その意味で、発話の線的特質とは、表現－受容の両過程にまたがって、意味が順序と相関しているということである。わたしたちにとって発話の線的特質が重要になるのは、ひとかたまりの発話のうちで、間や屈折などを問題にせざるをえなくなる場合である。ひとかたまりの発話ということはここでは厳密に説明しない。ただ、ひとつの文や、ひとつの段落や、ひとつの文章などにたいして、わたしたちがひとかたまりという感覚をもっているというだけにする。ところで、それにしても、ここでは線的特質それ自体は問題ではない。

発話の時間性ということの第二の内実は、発話が生じるということである。チョムスキー言語学とは異なった意味で、この事態を生成過程と呼んでおくことにする。わたしたちがたとえば時計を見て、「午前五時四十分」と言うときには、少なくとも、時計を見ることがあって次に「午前五時四十分」と言うことが来る。この順序のあいだに、わたしたちは時間を感じるができる。「午前五時四十分」と言うに至るという意味で、これはことばの生成であり、また、この順序が時間的に生じるという意味で、過程である。この時間性とは、もちろん物理的時間そのものではなく、物理的時間に支えられた人間的な時間である。詳しい説明はあとにまわそう。このことばの生成過程としての発話の時間性を明らかにすることがこの章前半の課題である。

第三の内実は、わたしたちが発話をくりかえしながら、そのたびに不十分さを見つけて新たな発話へ向かうということである。わたしたちはたとえばあるものごとを説明しようとして、何回もくりかえすうちだんだん適切な説明に近づいていくことがある。わたしたちにとっては、発話は一回一回全く切り離して行なわれるのではない。それ以前の発話をふまえて何事かを言うことも多いのである。その意味で、この事態を、発話の実践過程と呼ぶことにする。ここで実践ということばを使うということには、実践とは本来何事かを一回的に為すことではなくて、くりかえし行なうなかで不十分さに出会い、それを修正し越えていくことだという含みがある。この発話の実践過程を明らかにすることが、この章後半の課題である。

第二節 オグデン＝リチャーズの三角形

オグデン＝リチャーズは、『意味の意味』において、象徴（ことば）・指示物・思想あるいは指示の三者の関係を、次のような三角形で表わしている。（図1）この三角形を書いたオグ

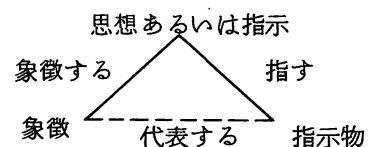


図1：オグデン＝リチャーズの三角形

デン＝リチャーズの意図は、象徴（ことば）が指示物とどう結びついているのかを示すことにあった。象徴はその指示物と直接に結びついているわけではない、象徴と指示物との間には、思想・指示が介在しているというわけである。彼らにとっては、同じ象徴（ことば）が人によりあるいは場合によって同じ指示物*と全く同じように結びつくわけではないということが問題であった。たとえば、日本の政治体制を指示物として、同じ民主主義という象徴を用いても、論者によって言わんとすることは異なるだろうし、このような論者どおしの議論はすれちがうばかりであろう。あるいは、実態をはっきりさせるためにかなり突飛な例をあげることもできる。いまよつんばいになったおまわりさんを指示物として、「犬」という象徴を考えてみればいい。「犬」がよつんばいであることに向けられた象徴なのか、おまわりさんであることに向けられた象徴であるのか、おそらく人によりちがうだろう。オグデン＝リチャーズの指摘は、象徴と指示物とが与えられていてもその間の結びつき方は一義的に明確なものではないという点にある。あたりまえのことをきちっと言いあてていて、**卓抜である。

ところで、オグデン＝リチャーズの三角形は、象徴の意味とは何かという問いから出発したものである。象徴が既にあるとその意味が何かという場合、常識的には、その象徴が表わす対象（指示物）を指摘することができる。しかしそれだけでは意味をはっきりしたということができない。象徴と指示物の間には思想・指示を想定せざるをえず、それがはっきりするにつれて、象徴が指示物のどのような様相に向けられていたのかもはっきりしてくる。このような事態を抽象することによって、象徴からその指示物に遡及する論理的関係が設定されることになる。つまり、①象徴がまず存在する。②象徴が象徴するのは思想・指示である。③思想・指示が指すのは指示物である。④以上の結果、象徴は指示物を代表する（間接的に結びつく）。

わたしのここでの問いは、オグデン＝リチャーズと逆である。わたしが時計を見る、そしてあと「午前五時四十分だ」と言うに至る。この過程を問うことである。オグデン＝リチャーズの用語を用いてごく大ざっぱに言うならば、指示物→象徴に至る過程、〈ことばの生成過程〉である。とすれば、わたしは、オグデン＝リチャーズの三角形の方向をひっくりかえさなくてはならない。

第三節 オグデン＝リチャーズ逆転三角形

オグデン＝リチャーズの三角形を単純にひっくりかえせば、次のような図を得ることになる。さしあたりこれを、オグデン＝リチャーズ逆転三角形と呼ぶことにしよう。（図2）

この逆転三角形は、ことばの生成過程が指示物を単純に象徴へ変換するものでないことを示している。

この逆転三角形が示すものをもうすこし詳しく見ていくことにしよう。まず、指示物は、オグデン＝リチャーズによれば「もの・こと」である。さらに眼前にあるもの・ことの場合もあれば、表象を介して間接的にとらえられたもの・ことである場合、実在しない空想上のもの・こと

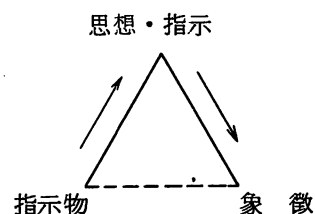


図2：オグデン＝リチャーズ逆転三角形1)*

の場合と分けることもできる。これらの「もの・こと」は、発話者がそれに向きあうという意味で、発話者にとって対象的な「もの・こと」である。わたしが窓の外の雨を見て「秋雨だなあ」と言うとき、雨が降っているということ・雨の降るありさまにわたしが向きあう。雨がある情景を伴ってふっているという事柄は、わたしにとって対象的な事態である。消しごむが見つからずに「消しごむはどこや」と言うとき、この不在の消しごむがわたしにとって対象的なものである。「対象的」という語にどのような含みがあるか、それは第 節^{**}で再びとりあげるが、いまのところはだいたい了解してもらえらるだろう。

つぎに、ことば（象徴）は表現である。表現それ自体は発話者にとって対象的なものではない。発話者が自分の表現（ことば）に対象的に向きあうときには、そこには発話ではなくて受話という事態が生じはじめる。いまことばを音声による表現あるいは文字による表現にかぎれば、（註 1）音声・文字は物的なものに支えられている。空気のあるえやインクのしみの類がなければ、ことばはことばになりえない。けれども空気のあるえやインクのしみそのものがことばではなく、空気のあるえやインクのしみのある形式がことばである。ことばは、物的なものに支えられている、あるいは、物的なものにこめられる。

もの・ことは、対象的であるという意味で発話そのものではない。発話にとって外在的である。またことばは、物的なものに支えられるという意味で、生成した瞬間に発話者の手を離れて自存化する。これも発話にとって外在化する。とすれば、発話にとって外在的なものと外在化するものとの間にあって、発話そのものであるものとは何だろうか。図 2 では、指示物と象徴との間に、思想・指示が挿入されている。オグデン＝リチャーズ三角形における思想・指示は、象徴から指示物への論理的遡及の過程で、こういう思想・指示だと指摘できるものであった。つまり、観察者（註 2）から見て対象的に指摘できるものであった。しかし、逆転三角形においては、「ことば」と「もの・こと」を結ぶ「思想・指示」とは、特定して指摘できるものではなく心的な過程である。発話を対象にする場合には、この心的過程を対象化することができるが、発話それ自体にとっては、もの・ことを把握し表現するという心の働きは捉えられない現動的なものである。心の作用と言うこともできる。

わたしたちの課題は、発話における心的過程を明らかにすることであるが、この課題を二つの面から探求することになるだろう。ひとつは、心的過程がどのように推移していくのかという働き方の面であり、もうひとつはそのように心的過程を働かせるに至る心的原動力が何かという面である。もう一度、逆転三角形を示しておこう。（図 3）

さて、オグデン＝リチャーズ三角形と逆転三角形とを較べてみると、いくつかのちがいが見つかる。第一に、方向が逆である。第二に、オグデン＝リチャーズの三項は、観察者から見て対象的なものの項と考えられている。ことばが対象的な素材であり、そこから論理的に遡及して、思想を対象的に指摘し、指示物を対象的に確定する。それに対して、逆転三角形は、発話者の心的過程を問題にしようとしている。このちが

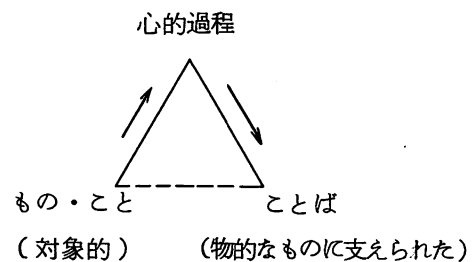


図 3：オグデン＝リチャーズ逆転三角形(2)

いは、ことばの意味は何かを問おうとする〈意味〉の立場と、ことばはどのように生成するかを問おうとする〈生成〉の立場の差異によるものだ。しかも、三角形が逆方向からたどられるように、〈意味〉と〈生成〉とは逆立しているとさえ言えるかもしれない。だから、二つの三角形を複合して次のような図を書くこともできる。(図4)

「ことばの意味」は、実は言語学においても混乱している分野である。その混乱をとりたてて描写する必要はないだろうが、〈ことばの意味〉と〈ことばの生成過程〉との関係ということに限定してみても、基本的な考え方のちがいがさまざまにある。オグデン＝リチャーズをはじめ、ハヤカワらは、ことばの意味をことばの生成過程と全く別に考えているとしか思えないし、それに対して、三浦つとむは、ことばの意味をことばの生成過程から考えようとしている。確かに、ことばの意味をことばの生成過程と関わらせてきちんとらえておかないとさまざまな誤まりが生じるかもしれない。しかし、別の言い方をすれば、わたしたちの常識的な意味のとらえ方は、オグデン＝リチャーズ風の方向をもつものであって、どのように精緻にしてもオグデン＝リチャーズをそう超えるものではないのである。そういう見方からすれば、わたしたちの常識的な意味のとらえ方は、ことばの生成過程と逆立したものだと言えるだろう。逆立したものだから、通常は逆立したままで事足りるのに、ことばの理解がその生成の瞬間に関わる場合、たとえば文学の場合には、意味は生成過程に脅かされるのである。こう考えていけば、わたしたちは、意味を生成過程のうちで考えなおすことが適当か、それとも意味は通常のとらえ方のままにとらえ、そのうえで生成過程との逆立を指摘すべきなのか、そう簡単には言いきれないことに気づくだろう。科学的な理解は、たぶん常識では理解できないこと、常識の理解に疑問が生じるときにはじまると思う。このようなことから、科学的な理解は、常識の否定として生じるのではないだろうか。科学的な知識の獲得が生活から切り離されて、常識を否定し知的上昇として経験されるのは、科学的な知識が常識の単純な否定として成立したという事態にも根拠をもっているのではないだろうか。

もっともこのような考え方でさえほんとうに確信するためには、もっと精密に考えていかねばならないし、仮に事態がこのようなものであったとして、さて、常識を補い常識に疑問をおこすことからにはじまる科学的な理解が単純な常識否定に陥らない為にはどのような道を歩めばいいのかも簡単に言えるようなことではない。わたしは、図4の複合図式において、常識の精緻化であるオグデン＝リチャーズ三角形を誤まりとして単に退けてしまうのが危いことだということ、しかし、オグデン＝リチャーズ図式がそれだけではやっていけないような瞬間もあることを示そうと思った。その意味で、わたしは、ことばの生成過程を考えるさいにオグデン＝リチャーズと異なった道をと

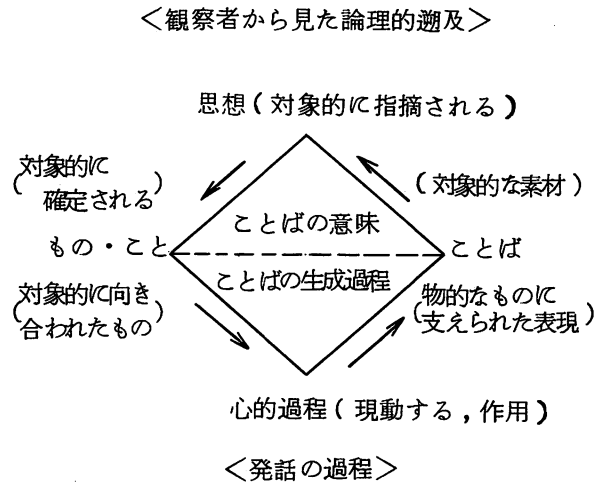


図4：オグデン＝リチャーズ三角形と逆転三角形との複合図式

るが、それは、オグデン＝リチャーズと問題が異なるからであって、彼らの考え方を否定するものではない。

(註1) 音声・文字以外の表現については、第五節、内語の項を参照せよ。

(註2) いうまでもないが、観察者とは、発話を観察する場に移行した者という意味であって、発話者本人であっていいし、また他人でもいい。

第四節 用語、論述の対象の明確化

さて、より詳しい議論にはいるまえに、この節では、わたしたちが扱おうとする対象を、用語の点からもう少し明確にしておこう。

第一項 ことばと言語

ことばは、ことばの生成過程の末端で生じる。わたしたちはことばを生成過程において問題にするから、個々のことばは個々の具体的な生成過程と結びついた具体的なものである。ところが、生成過程の末端で生じることばは、第一に心的過程の表現として対象的に向きあいうるものとして成立するということ、第二に、空気の振動やインクのしみという物的なものを支えにして成立するということから、ことばの生成過程から切り離して自存的なものとして眺めうるようになる。さらに、このような自存的なものが社会的に共通なものとして成立するとき、言語という自己完結的な総体が与えられることになる。ことばを言語として扱うのにはそれなりの根拠がある。けれども、ここで扱おうとしているのは、言語ではなくて、個々の具体的なことばである。それは、ここでの課題が、わたしたちにとって発話とは何かという問いを明らかにすることにあるからである。

第二項 ことばと発話

「ことば」と「発話」とは、対立する概念ではなく、いくらかずれた概念である。「ことば」は、話すこと書くことによって生じる、物的なものに支えられた表現である。「発話」は、話すこと書くことそれ自体である。だから、「発話の過程」を「ことばの生成過程」と言いかえても、ほぼさしつかえない。

ただし、「ことばの生成過程」という語が、オグデン＝リチャーズ三角形と方向を逆にするとはいえ、相かわらず、生成したことばを前提にしている趣きがあるのに対して、「発話の過程」という場合には、結局ことばとして表現されるに至らなかった過程、挫折した発話をも含んでいるというちがいがあがる。

もちろん、この段落で述べたことは、語の定義の問題ではなく、語がどうしてももってしまう含みの問題である。

第三項 発話・受話・返話

この論述のうちではとりあげないが、コミュニケーションを考える場合には、ことばを受けた人間が話した人間にどのようなことばを返すか（あるいは返さないか）が大きな問題になる。だから、コミュニケーションは、発話—受話をひとつの単位として、その積み重ねとして考えるよりは、発話—受話—返話をひとつの単位として、その積み重ねとして考える方がいいと思われる。（図5）

発話、受話、返話という語を上のような意味で用いる。

第四項 発話におけるひとまとまり

発話とは、観察による抽象としてはともかく、発話者にとっては、語のつらなりを発することではない。また、一語から成る発話においても、単にひとつの語を発することではない。発話とはひとまとまりのことばを発することである。このひとまとまりの意識を厳密に定義したり根拠づけたりはできないが、発話にはひとまとまりの意識がまとわりついている。このような例として、文、段落、文章などを考えることができる。事態としてはまずひとまとまりのことばの意識があり、次にそこからの抽象として語が成立する。

マルチネは、「二重分節」論で、二つの単位を抽出している。ひとつは、有意味な最小の単位としての語であり、もうひとつは語を構成する単位としての音素（音韻）である。わたしたちの言語能力は、たしかに、有限のものをういて無限のことばを作りうるというところに基礎があり、マルチネは単位の抽出によってそれを示している。しかし、マルチネが示すように語とはひとつの抽象（分節）によって得られるものである。抽象であることによってマルチネの論は少しもそこなわれないが、わたしたちにとってまず存在するのは、ひとまとまりの意識なのである。

このようなことを述べるのは、語彙論に傾いているように見える意味論（註1）とは異なり、わたしたちにとって「ことば」とはひとまとまりのものだと言いたいからに他ならない。ひとまとまりのものは、文、段落、文章のように、ひとまとまりのものが重層的に包みこまれてさらにより大きなひとまとまりができていく。文のなかにも、いくつかのひとまとまりを指摘することができる。たとえば、「雲・綿菓子のような」という文において、これを「綿菓子のような雲」という文と比較して、「雲」「綿菓子のような」をそれぞれひとかたまりとして、その間のつづきぐあい、間を問題にすることができるだろう。しかし、語は抽象的であって、決して具体的なひとまとまりのものではない。

語が抽象物であって、文のひとまとまりの意識が具体的であるということを真に了解するには、二つのことについて充分理解することが必要である。ひとつは、幼児の言語発達において語の意識と文の意識とはどのように存在していたかということであり、もうひとつは、一語文とはどういう

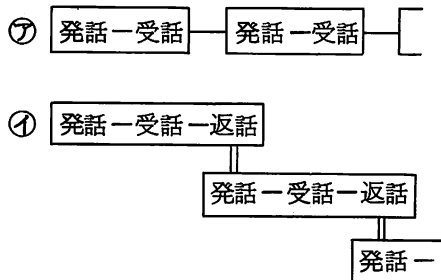


図5：コミュニケーションの2つのモデル

⑦ 「発話—受話」モデル

① 「発話—受話—返話」モデル

ものかということである。

こどもの言語発達、第一に語が成立し、そのあとで語をつなぎあわせて文ができると思えなくもない様相を示しているからである。たとえば、ウェルナー＝カプランは、『シンボルの形成』において、幼児の言語発達を次のように分けている。

- ① 幼児の初期の言語発達は、わけのわからぬ音をベチャクチャ話す〈喃語〉段階からはじまる。これは人との〈接触〉の態度を表現するものである。
- ② 次に、間接詞的な高音の〈呼び声〉段階がつづく。これは〈欲求〉の態度を表現するものである。
- ③ 第三に、指示的・描出的な〈命名〉段階がつづく。これは、〈陳述〉の態度を表現する。
- ④ 第四に、指示的・描出的な語音が範疇化されて、要素間が分節化されて結びつけられた二語音発話がはじまる。

この四段階を単に現象として見れば、あるいは、第三段階で語が成立し、第四段階で文が成立しているのだと思えなくもない。別の見方をすれば、第三段階で成立しているのは〈一語文〉、第四段階で成立しているのは〈二語文〉であると思えなくもない。

ところが、ウェルナー＝カプランは全く別の見方をする。彼らは、伝達の主要な側面を、〈態度の表現〉と〈指示作用〉に分け、〈命名〉段階においてはじめて〈指示作用〉が生じる、つまり、この段階ではじめて〈伝達表現〉としての発話が生じるのだという。しかし、この段階では文が生じているとはいえない。文が生じるのは、語音が範疇化され分節化されて結合される〈二語音発話〉の段階である。なぜならば、ここではじめて語音は単なる語音ではなくなり、統語的機能をもったものになるからである。以上のことから、ウェルナー＝カプランは二つの結論をひきずり出す。

- ㊦ 一語音発話（モノレーム）は、文ではないのだから、これを〈一語文〉と呼ぶのは正しくない。
- ㊧ 文が成立するのは、語音が統語的機能^{*}をもつときであり、また語音が単語として成立するものこのときだから、文の成立と語の成立とは同じ事柄の裏表にすぎない。語の成立が先か文の成立が先かの議論は意味がない。

このウェルナー＝カプランの結論は、語と文とどちらが先かという議論に解決を与えるように見えるが、決してそうではない。むしろ何も言っていないに等しい。文の成立に対して統語的機能を基準にし、文の成立と語の成立は同じ事柄の裏表という外部の基準を与え、幼児の言語発達にあてはめて、はじめ与えたものと同じ結論を受け取^{**}っているだけだ。これでは、まるでプロクルステスのベッドである。

ウェルナー＝カプランの説に反して、わたしたちは先にあげた二つの説（註2）を考えてみることができる。わたしの考えでは、幼児においても、文の意識が先行しているように思える。ウェルナー＝カプランはレオポルドの観察例を引用している。レオポルドの娘は「a！」という音で、床に落ちているものをさして、「あれを拾って！」という欲求的態度と「あれを見て」という陳述的態度の混り合ったものを示したという。このような観察が正しいならば、幼児においては、表現の上でも、表現する意識の上でも成人の場合ほど分節化されていないが、ひとまとまりの文の意識が発話に伴っていたと言いうるであろう。この立場に立てば、〈一語文〉と言いうるだろうし、それどころか、第一段階（①）第二段階（②）さえ文の発話と言えるかもしれない。もっとも、この

場合、文というのは、いわゆる文法的なレベルでの機能^{*}を言うのではなく、ひとまとまりのものを発話したという意識のありように対応する表現をさしているのである。このような考え方によれば、幼児についても文の意識が先行すると言えるだろう。

ウェルナー＝カプランに反対するもう一つの説は、第三段階で語が成立し、第四段階で文が成立するのだというものであった。わたしたちは意識に注目するけれども、意識のみで全てが事足りるわけではない。意識とは形態に伴う意識であるはずだ。そのように考えてみると、第三段階では、語の形態がはじまり、第四段階で文の形態がはじまると言えそうである。

以上の二つの説を考えれば、わたしたちは、意識と形態の獲得とのズレを問題にすることができるだろう。意識の発達としてみれば、ひとまとまりの発話の意識は、未分化の融合したものから、分節したものへと発達する。ウェルナー＝カプランは、①話し手②聞き手③対象④シンボル体の未分化な状態から分節した状態への発達を問題にしている。それに対して表現形態の発達としてみれば、全く未分化な〈喃語〉〈呼び声〉の段階から〈モノレーム〉段階を経て、文を獲得しはじめる〈二語音発話〉段階に至るというわけである。意識の点では終止あるひとまとまりの発話という意識があるのに対し、形態の獲得の上では語が文に先行するだろう。しかし、ひとまとまりの発話の意識と呼んだものの、それは成人のひとまとまりの意識（文の意識）とは別であろう。どのように異なっているか、それがどのように発達するかについてはここで触れることはできない。

次に、一語文の問題にはいろいろ。幼児の一語音発話が文の発話であると断定するにはかなり躊躇するとしても、成人の一語音発話の場合にははっきりと文の発話であると言えそうである。時枝誠記によれば、単なる語の発音でなく発話である場合には、一語からしかならない発話も文である。たとえば「雨」という発話をとりあげれば、辞書の「雨」の項を「アメ」と発音してみるのとはちがって、そこに零記号で表わされる判断の陳述がくっついているという。（図6）

時枝国語学の文法を中心は、詞と辞の区別にある。詞とは、「山」「川」「走る」「悲し」「喜ぶ」などの、素材を一旦客体化し概念化して表現するもので、客体についての表現を専らにする。辞は、「ず」「じ」「む」「や」「だ」などの、観念内容の概念化されない、客体化されていない直接の表現であって、話し手（主体）の素材把握のしかたを専ら表現するものである。（註3）「雨」という表現は、「雨だ」という表現（図7）に比べてみると、主体の素材把握のしかたを表現する辞が形態としてあらわれないが、発話の意識として存在するのだという意味で、「零記号の辞」となっているというわけである。

時枝の説明のしかたはともかく、時枝の説明の前提には、「雨」という発話が話し手の意識においてひとつの発話であるかぎり「文」とみなすという考え方があって言える。時枝はこの点から、文の本質は、主語一述語の結びつけの機能にあるのではなく、話し手の辞による統括機能^{*}にあると言う。統括機能^{*}という用語はともかくとして、文の本質は、ひとまとまりの意識にあり、それが形態のうえて、辞のしめくくりの働き

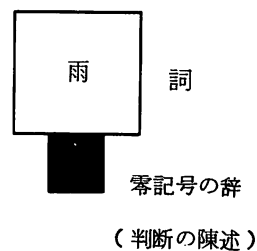


図6：「雨」という発話

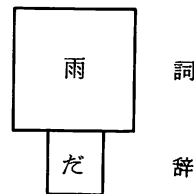


図7：「雨だ」という発話

に対応しているというわけである。

これ以上のことを時枝は述べていないが、日本語の文の基本が、詞と辞とからなる構造(図8)にあるのだとしたら、もっとも基本的な発話として「雨」というような一語文にあるのではないだろうか。それが、話し手の発話にこめたわだかまりを表わす辞が加わって「雨だ」になり、さらに、話し手のわだかまりを客体(素材)の表現について分節化し、「霧のような秋の雨だ」というような文になるのであろうか。このような文の発達傾向を、幼児の言語発達や歴史的な表現の発達について調べるかもしれない。

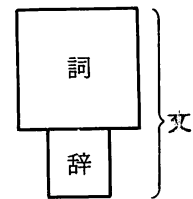


図8：日本語の
文の構造

日本語についてそのように言えるとして、日本語とは異なる欧米諸語に

おいても、文の本質はひとまとまりの意識だと言えるかもしれない。ブリース・パランは、『ことばの思想史』のなかで、命名こそは最初の判断であると述べ、次のような例をあげている。

「私は、空腹である」という表現を分析するとき……本当の思考操作は「空腹である」という述語を「私」という主語に結合することに存したのではなく、私が知覚する一つの状態を表現し、この状態を「空腹である」と名づけることにあったのである。この同じことがらを、子どもならばきっと、「おなかがすいた」とか「食べたい」というきわめて短い章句で表現するであろう。なぜなら、陳述をおこなうのはこの私自身なのだから。当人である「私」が陳述される必要は全然ないのだからである。(註4)

さらに、このことに加えて、メイエの主張を引用している。文の本質は主語一述語の結合にあるのではなく、陳述でありかつそれだけである。だから述語だけからなる章句や単一名辞からなる章句は、正常な文から省略が行なわれて成立したのではなく、それ自体正常なものなのである。(註5)これを説明して、パランはメイエの意図が、言語の第一の要素は「単語」でなくして「文」だと証明することにあったと述べている。(註6)

さて、この項をまとめることにしよう。わたしたちが扱うのは、ひとまとまりのものとしての発話である。「ことば」という語はそういうものとして扱うことにする。

第五項 対 象

オグデン＝リチャーズの三角形では「指示物」と呼ばれ、この論述のなかで「もの・こと」と呼ばれてきたものを、以後<対象>と呼ぶことにしよう。<対象>という語でそれぞれの発話において何をさしているのかは、以後の論のうちで明らかにしていくつもりだが、ここでは一つの点だけ明らかにしておくことにしよう。オグデン＝リチャーズは、指示物を「もの・こと」と説明しただけであったが、これでは、「イヌ」ということばに対して、実在するある犬が指示物であるという風に、一単語・一概念にむすびつく「もの・こと」ととられるおそれがある。わたしは、一単語・一概念にむすびつく「もの・こと」をも含みつつ、それよりもむしろ一つの発話にむすびつく事柄に重点をおいて対象を考えていくことにする。

(註1) このような意味論として、たとえば、ビエール・ギロー、ジョルジュ・ムーナンをあげる
ことができる。

(註2) 同頁11行から13行をみよ。

(註3) 時枝誠記 1941,『国語学原論』:242頁。岩波書店***

(註4) Parain,Brice,1943,Recherches sur la nature et les fonctions du langage,Gallimard,三嶋唯義訳,1972,『ことばの思想史』,P.42,大修館書店****

(註5) 同書。P.42*****

(註6) 同書。P.51*****

第五節 発話の心的過程

第一項 対象へのひっかかり

第三節の終わりに示した〈ことばの生成過程〉は、図9のようなものであった。この節での課題は、〈心的過程〉を明らかにすることである。

ことばの生成過程の始点にある対象は、はじめは発話とは関わりのないものとして存在している。発話と関わりのないものが発話の始点に登場するのはどうしてなのだろうか。この問いを次のように問い直してみることができる。

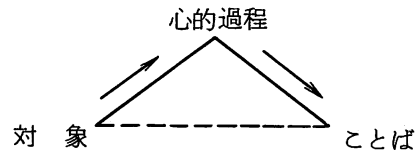


図9：ことばの生成過程

①わたしたちはたとえば机の上にあるえんぴつに気づくことなく終わることもあれば、気づいてもちよっと眼をとめるだけで通りすぎることもあるし、またそのえんぴつを手にとって使ってみることもあるだろう。このえんぴつについてさまざまに関わる関わり方のうち、発話するという関わり方が生ずるのはどのようにしてなのか。また次のように問うこともできる。②わたしたちの周囲には発話の対象になりうるさまざまなものがある。わたしはいまえんぴつのありようについて話すのではなく、けしごむのありようについてやコップのありようについてなどおそらく無限の事柄について話しうる。しかし、わたしはいまは1つの事柄についてしか話せないし、その1つが他のことではなくえんぴつのありようについてだというわけである。これはどのようにして生じるのか。

ことばの生成過程に対象がどのようにして登場してくるのかという問いは、上の①、②のようないくらか重なり合い、いくらかずれた二つの問いにすることができるのだが、それに対してそれぞれ異なった答えをすることになる。まず、②について考えることにしよう。他の事物でなくえんぴつについて発話するとき、そこには、えんぴつという対象に向き合うという事態が生じている。わたしは、えんぴつに、視覚や聴覚という現実的な感覚を通じて向き合ったのか、それとも想像力や想起によっていまここにはないえんぴつに向き合ったのかもしれない。とにかくここには対象への向き合いが生じている。次に①について考えてみよう。わたしたちがあるえんぴつを眼の前にして、「えんぴつがあるぞ」「このえんぴつずいぶん細長いね」「えんぴつ貸そうか」などと言うときには、えんぴつに対する驚きや疑問、他者に示そうという気持ちや確かめようという気持ちなどが生じている。このようにさまざまに言い表わすことのできる心の動きは、このえんぴつに気づいてそれだけで終わったり、手にとって使ってみるだけではすまないというものである。もっとも「すま

ない気持ち」とは言っても、発話者が「言わないではおられない」と自分の気持ちを確認したものではない。けれども、発話しないではすまぬ心の動きがあったにちがいない。

わたしは、①、②の問いについて考えたが、①、②の問いそのものには答えていない。①、②の問いに答えることは、個々の具体的な発話についてのみ為しうることである。ある発話について、②発話者が対象にどのようにして向き合うことになったのか、①その対象に対して発話せずにはすまぬ気持ちがどのようにして生じたのかは、発話者の発話の状況のなかで具体的に言えることである。ここでは、①、②の問いを逆転して、発話へと至る階梯で、対象へ向き合うこと、対象について発話しないではすまぬ心の動きがあると推論しうるだけである。この二つの事柄を併せて、「^{****}対象へのひっかかり」と呼ぶことにしよう。心的過程のいちばん対象に近い所（心的過程の始端）で、「対象へのひっかかり」が生じているのである。（図10）

ところで、この「対象へのひっかかり」、ことにそのうちの「発話しないではすまぬ気持ち」を、「発話の欲求」「発話への衝動」などと呼んでもいいだろう。しかし、このように言う場合、発話欲求・発話衝動なるもの一般が生じているわけではないということに注意しなければならない。「発話しないではすまぬ気持ち」は、確かに欲求・衝動と呼んでさしつかえないが、この気持ちは、それぞれ

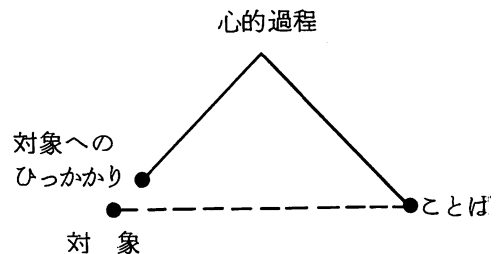


図10：心的過程(1)
対象へのひっかかり

の時点で個々の対象について生じるものであって、一般的な発話欲求・発話衝動が生じているわけではないのである。ある具体的な対象について発話せずにはすまぬ欲求・衝動であって、どのようなことばでもいいから発話しさえすればおさまる欲求・衝動ではないのだ。とすれば、「発話の欲求」「発話への衝動」とは言っても、個々の発話について記述することばであって、発話一般の動因を形成する実体的なエネルギー源ではないことは明らかであろう。スーザン・ランガーは、「シンボル欲求」を人間の主要な欲求のひとつに数えている。この「シンボル欲求」ということばにしても、上のような事情を踏まえて用いるべきである。（註1）

第二項 表現

心的過程のことばにもっとも近い末端では何が生じているか考えてみよう。ことばをいま音声によるものと文字によるものについて考えてみれば、これら音声・文字は物的なものの形態であるから、物的なものの実質に形態を与える身体の動きが必要である。音声の場合には、のど・舌・肺などを中心とした身体の運動であり、文字の場合には、手首や腕などを中心とした身体の運動である。この身体の運動を境にして、ことばは物的なものに支えられるようになる。このような事態をいま「表現」と呼ぶことにしよう。わたしたちの課題は、「表現」の心的側面を明らかにすることである。

だがここで、わたしたちは発話を問題にするときつねに行きあたる難問のひとつに面することになる。「表現」の心的側面の本質は何かと問う場合、それと相関して「表現」とか「ことば」とい

う語で何をさしているのか問題になる。(註2)

「ことば」という語で何をさしているのかおよそ三つの立場が可能である。

- ①音声・文字のみになったものをことばだとする立場。
- ②音声・文字に加えて、音声にならないが心の中で音声と類似の拍子を取りながら黙って言ったものもことばだとする立場。(後者を以後、「黙音」と呼ぶ。)
- ③音声・文字・黙音に加えて、われわれが思考するときに伴う心の中のわだかまりの節のようなものもことばだとする立場。(たとえば、机の上をざっと見わたして、インクびんを見つけるとする。これを見つけたとき、わたしたちは「インクびんだな」というような感じに了解するが、それには音声も文字もふつうは伴わないし、音声のときと類似の拍子(リズム)を取りながら黙って言う「黙音」を伴っているわけではない。この了解には、心の中でわだかまりの節のようなものが伴っているだけである。このわだかまりの節のようなものを概念と呼んでいいかいまは留保する。)

そして、表現とはことばを発することだという立場をとる限り、①～③の立場ごとに「表現」とは何かという考え方が異なってくるはずである。

言語能力の発達という点を考えれば、次のように考えることができるだろう。

- ⑦はじめ眼前の対象に対するひっかかりがある音声と結びつく。
- ⑧音声と結びついたひっかかりが、反作用として密度の濃いものになっていき、それが「わだかまりの節」になる。
- ⑨音声のリズムに対応して、心的なリズムが形成されていく。心的なリズムが音声のリズムなしに充分自存できるようになって、「黙音」が生じる。

おそらく、人間の言語能力の発達についても、幼児の言語能力の発達についても、このような事態が仮設^{*** **}しうる。この仮設からすると、「わだかまりの節」「黙音」は、「音声」「文字」からの派生物であるといえるだろう。けれども、派生物であるから本質でなく、始源にあったものが本質であるとは言えない。たとえば「音声」と「文字」を考えてみてもいいだろう。「文字」が「音声」からの派生物であることは否定しえない。文字ははじめ、ある限定された用途に用いられていた。けれども、はじめの限定された用途から別な用途へと拡げられていくにつれて、文字は単なる付属物・代用ではなしに、ひとつの能力と結びついたものになる。わたしたちの思考の能力、文学的な能力などがそれである。(註3)

全く同じように、「音声」「黙音」「わだかまりの節」も、成人の発話においては、それぞれ、いくらかずつずれた人間の活動や能力と結びついていると言える。では、これらのそれぞれを貫通している「表現」の本質とは何であるのか。

まず、わたしは、「音声・文学」「黙音」がことばであり、「表現」とは現象としてみると、ことばを発することであるという立場に立つ。(②の立場)表現するとは、ある一定の形をもったものを産出することである。産出された一定の形のことである。音声・文字は、物的なものに支えられた形態であり、そのことによって可聴的・可視的である。黙音は、音声の場合のリズムが実質を失い、心的リズムとして形のみが自存したものである。だから可聴的でも可視的でもないが、そっ

くりそのまま音声に移しかえることができるし、しかもより重要なことであるが、発話者にとっては、一定の形を産出したということそれ自体においては、音声・文字も黙音もちがいはないのである。それに対して、「わだかまりの節」は、一定の形をもったものではない。黙音が、音声・文字による発話における表現（心的過程の末端）が、実質を捨てて（だから実質を作るための身体の運動を捨てて）形態だけになったものに対して、わだかまりの節は、発話における対象へのひっかかり（心的過程の始端、ことに対象への向き合い）が、発話のくりかえしに伴って、発話に伴う心的過程の部分の吸収して自存したものである。「わだかまりの節」は、ことばでも表現でもない。ことばや表現の反作用として形成される心的なものである。

このような「ことば」「表現」の捉え方からすれば、「表現」とは、一定の形を外部に産出すること、つまり、「外化」だと言うことができるだろう。外部とは何の外部か。はじめ、音声や文字で発話する場合には、ことばという形態を伴う物的なものを産出することが表現であった。このときには、私の身体の外部（つまり私の身体の外なる空気・インクのしみ）に外化することと、私という心的なものの外部に外化することとが、同時に行なわれていた。言い換えれば、私の身体の外部に外化することに支えられて、私という心的なものの外部に外化することが生じていたといえるし、また、私の身体の外部に外化することに支えられなければ私の心的なものの外部に外化することが生じないほど、心的なものは固定していなかった（自律していなかった）といえるだろう。心的なものが自律し、心的なものの外部と身体の外部とが分離しはじめると、身体の外部への外化に重点を置いた発話は、意思疎通のため他者に向けられた発話（コミュニケーション）となり、心的なものの外部への外化に重点を置いた発話は、自分のなかに生じたものを表現することになるだろう。

表現の本質とは何かという問いはつかみにくい問いである。一方ではわたしたちは言語の発生に戻ってみるか、他方では、さまざまに現われ方の異なる発話状況の波にもまれるかしかないし、そのどちらにしても本質だとは言えないだろう。個々の発話の心的過程を問題にしようとする私の視点からすれば、「外化」であると言うしかない。（図 11）

（註4）

第三項 把握とことば（思考とことば）（註5）

把握とことばの関係についてここで考えておこう。というのは、ふつうの言語論にはあまり出てこない「黙音」という考え方を提出し、これを「わだかまりの節」と分けて「ことば」に入れたからであり、また、「概念」「内言語」という語を留保して「わだかまりの節」という語を用いているからである。だが、そういったことの意味を説明したり、そのため大脳生理学派（外言語--内言語派）や実存主義的現象学派などの「思考とことば」論について論じたりはせずに、わたしの「把

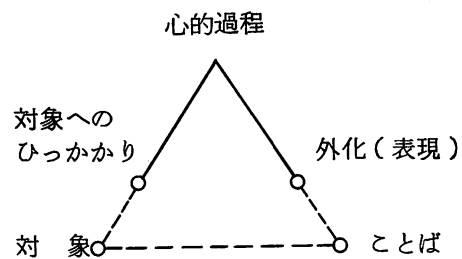


図 11：心的過程(2) 外化

握とことば」についての考えを展開しておくことにしよう。

ことばは、一定の形態（音声・文字・黙音）へと表現（外化）されたものである。把握することとは、対象を分節統合して人の世界のうちに位置づけ、同時にそれと相関して心のうちに、わだかまりの節が生じていることである。だから、把握とことばとを比較するよりは、把握することと表現することとを比較する方がいいだろうが、この両者はまったく次元を異にするできごとである。この次元を異にする二つのできごとがどう絡み合っているのだろうか。

まず、ことばの方から考えてみよう。ことばの方からことばと把握の関係を考えるには、ことばを大まかに二つに分ける必要がある。ひとつは、つむぐようにして発話された新しいことばであり、もうひとつは、使い古されたことばである。（もっとも、この二つは理念型的極端というべきで、ことば総体を二つに区分するカテゴリーではない。）つむぐようにして発話された新しいことばの場合には、対象へのひっかかりがことばに表現されるわけだが、表現とともに対象へのひっかかりが明断に把握されるようになる。たとえば、次のような例を見ればよい。魯迅の「呐喊・自序」の一部である。

私がこれまで経験したことの無い味気なさを感じたようになったのは、それ以後のことである。はじめ私は、なぜそうであるのかがわからなかった。後になって考えたことは、すべて人の主張は、賛成されれば前進をうながすし、反対されれば奪闘をうながすのである。ところが、見知らぬ人々の間で叫んで相手に一向反応がない場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかも涯知れぬ荒野に身をおいたように、手をどうしていいかわからぬのである。これは何と悲しいことであろう。そこで私は、自分の感じたものを寂寞と名づけた。

魯迅では、味気なさとしてあった対象へのひっかかりが、後年、この文章の後半部のように考えられ、寂寞と名づけられることによって把握されるようになっていく。新しいことばがつむがれるときには、表現とともに把握が生じる。対象へのひっかかりがより明断なものへと把握され、把握された明断なものが表現の反作用の結果わだかまりの節として残ることになる。魯迅のこの文章は、後年の考え方（文章の後半部の内容）や「寂寞」という名が結晶化する際に書かれたものではない。その点で、この文章にこめられた迫力は、後年の考え方や「寂寞」という名が生じる迫力そのものではない。文章を書いた時点をさかのぼったところにある魯迅の営みにこもった気魄と、その営みを過去に向って見ている魯迅の現在のありよう、その迫力（日本語訳ではあるけれど、短い文を連ねて簡潔に言い切る文章にこめられた迫力）とが二重がさねになったものである。だから正確には、把握と表現とがともに生じるような瞬間ではないにしても、魯迅がこういう考え方をするようになった時、把握と表現とがともに生じたであろうことは了解できるだろう。いったん把握が生じてしまえば、わたしたちは、心のうちに一瞬わだかまりの節を生じさせるだけで、魯迅のこの考え方はことばを反復させることなく、想起できることになる。

また、たとえば、「わたしたちが戦えるのは自分の問題だけだ。」ということばを考えてみてもよい。わたしたちが、あるひっかかりをこのように表現してみたときのことを考えてみよう。おそ

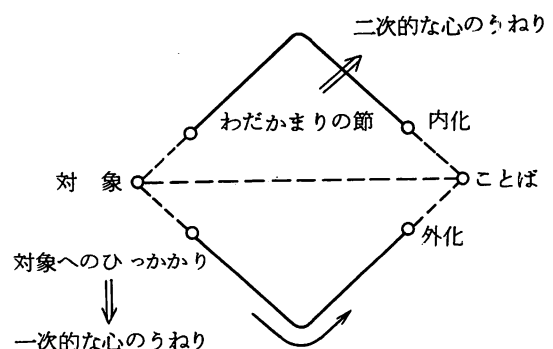
らく、このことばは彼のひっかけりを明晰にするとともに、それ以上の含意をもっていたにちがいない。そして、この含意におそれおののいて、ほんとうにそうなのかと自問自答して、そのあとで、はっきりとこの表現の意味を把握することになったであろう。この場合のように、表現と把握とは同時にやって来るといふものの、把握がわだかまりの節となるには、把握の確認が必要である。新しいことばがつむがれるとき、表現は一定の形をもつ明確なものでありながら(註6)その表現に伴う把握は事態を正しく言いあらわしているかどうか不安定である。把握の確認は表現を対象として把握してみることにし、表現のあとで行なわれる。わたしたちは、自分の言ったことばの意味を、かなりあとで訂正して了解することもある。

以上のことから、新しいことばがつむがれるときには、対象へのひっかけりが表現にもたらされて把握が生じる。把握とともに把握が確認されることもあるが、把握のあとで確認し直されることもある。把握が確認されて、把握が真に自分のものになることを「内化」と言おう。(註7)内化とともに心のなかに「わだかまりの節」が生じる。では、使い古されたことばの場合はどうだろうか。

使い古されたことばの場合、たとえば「電話が鳴ったよ。」ということばを考えてみればよい。電話が鳴る。それに対して発話者が、電話が鳴ったと把握するわだかまりの節をもつ。このわだかまりの節が、それと結びついて用意されたことば(表現)へと形を成す。表現することが同時に把握することではないが、把握はかつての表現の反作用として生じているわだかまりの節とともに生じている。ここでも、新しいことばとは少しちがうけれども、ことばと把握、表現と把握とは無縁のものではない。

次に思考の側から考えてみることにしよう。この場合、思考を知的な思考から外延を抜けていくと、二つの方向に拡大する。ひとつは、世界の分節化・自己の分節化という意味での思考であり、もうひとつは、無意識の衝動や無意識の思考というものも含めて、心のうちに生じるわだかまりやうねりのような意味での思考である。(ただし、ここでいう「わだかまり」は、先に発話の反作用として述べた「わだかまりの節」とは異なるものである。)

心のわだかまりやうねりの方から考えることにしよう。この心のわだかまりやうねりは、発話の過程においては対象へのひっかけりの位置に立ちうるものであるが、発話によって生じた把握=わだかまりの節にはなりようのないものだ。仮設的に言えば、心のわだかまりやうねりは、わたしたちの身体的活動において、世界との間に生じたきしみである。世界との間に生じたきしみとは対象へのひっかけりという心のうねりとして存在する。わたしたちは、自分の心のうねりをも対象化して話すことができるので、対象へのひっかけり方にさらにひっかかってみせることもできるが、この対象へのひっか



- (註1) スーザン・ランガーが、仮に、「シンボル欲求」という語を一般的な欲求として用いるのだとしたら、窮極的には次のような事柄について言っているのだと思う。「人類は、ある時点でシンボルを用いることを獲得して、つぎつぎと高度のものを獲得していく。これが単に能力というだけなら使わずにいることも可能だ。けれども人類はいったんシンボルを用いることを覚えてしまい、シンボルを用いるのを止めたことがない。あれやこれやの個々のシンボルについては、消長があるにしても、シンボル使用そのものは止んでない。これは欲求としか言いようがない。」わたし自身は、こういう考え方に疑問があるが、いまはうまく展開できないので、触れずに置く。
- (註2) この点は第一項ではふれなかった。第一項では、①または②の立場を暗黙のうちにとっている。
- (註3) 能力とはいっても、そこには評価はない。この能力は人類の獲得した正の能力であるとともに、それによって対象や話し相手に向かう身体の動きを連動した話す能力を減少させた負の能力であり、また、社会的な偏在によって、支配の能力と結びついてもいた。
- (註4) 個々の発話がどのような経過をたどって生成するのかという視点を「自然主義的(naturalistic)視点」と名づければ、これが私の視点である。これに対して、発話という事柄がわれわれのどのような在り方を開示するのかという視点が考えうる。これを「形式主義的(formalistic)視点」と名づけることができる。たとえば、発話を中心として、その両端に象徴化された世界と生まの自然世界とを見るようなことを考えることができるだろう。
- (註5) 通常は、「思考」と呼ばれ「把握」と呼ばれていないが、「思考」には推論というイメージが色濃くつきまとうので「把握」としておく。
- (註6) 意味が明確というのではなく、表現が他とまぎらわしくないということ。
- (註7) 内化には、実践的には2つの段階を画することができる。第一段階は、把握を了解すること、第二段階は、把握を生きることである。

(はいにわ ひさひろ)

【 編者註 】

序論

- * 略字を「東大闘争」と改める。

第一章 第二節

- * 「を」か「と」か判別しかねたが、前後の文脈より「と」と決定する。
- ** 「あていて」を「あてていて」と改める。

第一章 第三節

- * 「オグデン＝リチャーズ逆転三角形」を「オグデン＝リチャーズ逆転三角形(1)」と改める。
- ** 草稿は、節の番号を記していない。

第一章 第四節

- * 略字を「機能」と改める。
- ** 「得って」を「取って」と改める。

- *** 「時枝〔1941〕P.P.231-232」とある表記を改める。
- **** 「Brice parain〔1942〕42頁」とある表記を改める。
- **** 「同上参照」とある表記を改める。
- ***** 「Brice parain〔1942〕51頁」とある表記を改める。

第一章 第五節

- * 「感官」を「感覚」と改める。
- ** 「さまざま」を「さまざまに」に改める。
- *** 「成しうる」を「為しうる」と改める。
- **** 「併わせて」を「併せて」と改める。
- ***** 「仮説」を「仮設」と改める。
- ***** 「つち」を「うち」と改める。

〔編者付記〕

本論文の執筆者である灰庭久博君の略歴を記しておく。

- 昭和28年3月22日 大阪府天王寺区にて生まる。
- 昭和46年3月 大阪教育大学付属高等学校（天王寺校舎）卒業。
- 昭和46年4月 東京大学教養学部理科1類入学
- 昭和49年4月 東京大学文学部社会学科進学。
- 昭和51年4月 東京大学大学院社会学研究科社会学Aコース修士課程入学。
- 昭和53年4月18日 頭部腫瘍により大阪大学付属病院にて逝去。